

生滅の法則について

川田 熊太郎

一 緒 語

われわれ自身が生滅する者であり。そのわれわれを取囲む環境又はわれわれを容れる器たる物が生滅している。故に考へる人にとりては生滅が大いなる問題と成る。故にこれは諸哲学の、また諸宗教の重要な課題となつてゐる。古代ギリシヤ哲学においては「生成と消滅」genesis kai phthora が問題であり、ユダヤ教およびキリスト教においては（虚無からの創造）が言はれ、これは聖書の神の全知・全能の問題につながる。チャンドーギア・ウパニシャッド（Chāndogya upanīśad）は「無有」asat から「有」sat の生成することを強く斥けて、唯一の有から総べての物が生成することと、従つてそれがあることを比喩をもつて反復して説いている。そしてここにウパニシャット哲学の根本問題がある。仏教においては煩惱と菩提・明と無明・生死と涅槃、

などが言はれるが、これは仏教が生滅する物の無常を問題とすることから発生していると言はれやう。

このやうに広く見わたすならば、生滅は、たしかに、諸哲学および諸宗教にとりての根本的諸問題のうち、少くとも、一つである。そして既に種々の解答が差出されているのである。今ここでは仏教のそれを見ることに努めよう。もちろん、これも多くの難問題を内に持っているが、今ここで問題はそれを二三の哲学および宗教のそれと比較することである、というのは若し、これをしなければ、仏教の思想の独立性すら危くなる恐れがあるからである。

二 仏教における生滅の法則

この問題の考察のための手懸りは諸経および諸論のうちに無数にある。しかし今ここでは梵文入楞伽經（南条本）のうち

るから。

経は言ふ

「大慧は問ふた。世尊よ。諸の識に幾種の生・住・

滅がありや、⁽¹⁾と。」

此の生・住・滅に因みて、この小論の表題のうちに「生滅」の文字を用いたのである。この問に対して世尊は答える。

「滅と生と住との各に相続 prabandha と相 laks-

ana との生・住・滅がある。これは外道の人々に

りては覺られない」と。

世尊は言葉をつづけて言はれた。⁽²⁾ (以下取意。) (一) 識に

三種がある、⁽³⁾ 轉の相 pravṛtilakṣaṇam のと、業の相 kar-

malakṣaṇam のと、⁽⁴⁾ 眞の相 jātilakṣaṇam のと。⁽⁵⁾ (2) 更

に、所謂八つの識は、総括すれば、二種である、現識 khy-

ātivijñānam と分別事識 vastuvikalpavijñānam との。⁽⁶⁾

(3) これらは二であるが不可離の相のものであって相互に

因と成る性質のものである。⁽⁷⁾ (4) 現識は思議すべからざる

熏習の轉變を因としているもの、分別事識は境の分別の因で

あり、無始時以来の戲論の熏習を因とするものである。

つづいて是等について生住滅が言はれる。

(一) 相の滅 lakṣaṇanirodhaḥ — 一切の根の識の滅、

即ち、アーラヤ識が持っているところの不真なる分別の熏習

の種々が滅すること。

(2) 相続の滅 prabandhanirodhaḥ — (a) 依止 a-

śraya に、即ち、無始時以来の粗重の熏習により、(b) ま

た対象に、即ち、自心所現の識の境についての分別による。

この依止たるアーラヤ識と、この分別たる轉識とは異 anya

でもなく、不異 ananya でもない。かくて轉識が滅すれば、

アーラヤ識も滅するでもあろうが、それは諸識の自の眞の相

の滅ではない。

(3) しかし、それは業の相の滅である。

(4) 若し自の眞の相が滅するならば、アーラヤ識の滅が

あるであろう。しかしアーラヤ識が滅すると説くならば、こ

の説は外道の断滅論と異ならぬであろう。

(5) 即ち外道は説くのである、境の能取が終息すれば、

識の相続が終息する、そして識の相続が終息すれば、無始以

来の相続の断滅があるであろう、と。

(6) 外道は作者 karanam によりて諸の識の相続や轉

や生を説く。その作者 (創造者などの義) とは勝性 pradh-

āna (質料)、士丈夫 puruṣa (觀照者)、自在 īśvara (支

配者)、時 kāla 微塵 (anu 原子)、などである。

右はその全体が大経からの抄録かと言はるる現存の梵文入楞伽經の一節から、今ここでのテーマを考察するに必要な

部分の抄録せられたものである。この経の成立したる第四世紀末の頃には仏教哲学はほぼ展開の極に至っており、その術語は洗練せられ、思想は精緻そのものとなっている。ゆえに、その思想を知っている者には、その術語を以てしたる簡単な抄録が備忘録として十分に役にたったのであろう。それゆえ、今ここでのこの抄録の抄録は、当然に説明を必要とする点を多く持っている。しかし、その説明は今ここでの目的ではない。

(1) 生滅。これはここでは印度的仏教的意味にてのものである。そしてそれは諸の識のそれである。

(2) 諸の識とはこの経では八種の識である。

(3) それが総括せられて、二と言はれる、現識と分別事識との。この二は相互に因となる。

(4) これら諸識の相続、転起を外道の人々は各自の種々なる作者(質料や創造者や、その他)によりて説く。

(5) しかし仏教では、例をもって言えば、眼識は色と光との集起によりて、色と光とを因として、生起するとする(梵本第三十九頁第五—七行)。ゆえに、それは、普遍化するれば、因と縁とによりて生起するもの、縁起に基づくと、なされているのである。

(6) この縁起はここでは識のそれであって、物のではない。これは徹底せられた唯心説の主張である(梵本三十八・

八、四十・八などを参照)。

(7) 自の真の相の滅は無く、アーラヤ識は断滅しない。所取と能取とを離れたるところに真如が現はれ、清められたる、この意味において最高なるアーラヤ識がある(偈頌品第五十九偈を参照)。

かくの如くに思想内容の要点を記すならば、諸種の問題が起る。その一つは眼識の生起についての右のテキストの意味を普遍化して、それは縁起に基づくとなされていると見ることである。というのは、経のこの箇所は明らかに縁起の表現を用いていないから。ゆえに、この普遍化が証明せられなければならぬ。もちろん、仏教は縁起を説くものとする一般的了解からこの眼識と光と色との例を考えるならば、この証明は不必要と言はれるでもあろう。しかしこの断片的なテキストの範囲内にて、このテキストの意味するものを把握しようとするれば、この証明が必要となる、というのはテキストのテキストからの・思想内容の把握が一般的了解に優先して、かえってその了解をそのたびごとに、吟味しなければならぬから。

さて、その証明を、このテキストの範囲内にて差出すもの、それは梵本第四十一—四十一頁に見出さるる“abhūtvā” (二回)と“bhūtvā” (一回)とである。これらによる証

明は当然に間接的なものと言はれうる、というのは、それは破邪を主要目的とするのであるから。そして破邪によりて顯はされた正は、ただ単にその破邪によりて、言はば、指示せられるのみでなくて、肯定的に説示せられることが必要であるから。けだし、あれでもない、これでもない、というに止まらずして、来て視よと言はれなければならぬ。

その「abhūtvā」と「bhūtvā」とについて、先づ、三訳を参照し、次に、それによりて得られたものを述べることにする。

先づ三訳の参照。

(a) 七巻本について見るに、この二語の訳として一定の用語が一貫して用いられているのではない。

(1) abhūtvā は訳されていない。「妄計非有及有、於因果外、顯現諸物、依時而住。或計蘊界処依縁住。有已則滅」(大正第十六巻、頁五九三下)。

(2) bhūtvā は右の引用文の最後の文「有已則滅」のうちの有已である。

(3) 惟うにこの引用箇所は原梵本をやや異にするか、又は取意の訳かであろう。

(4) 若し bhūtvā を「有已」と訳するとすれば、abhūtvā は「無有已」と訳されうるであろうが、この訳語が見出されないのみならず、abhūtvā に該当する文字が見られ

ない。

(b) 十巻本について見るに

(1) abhūtvā は「本無」と訳されている(大正第十六巻頁五二二中)。

(2) bhūtvā は訳されていない。若し abhūtvā を「本無」と訳するのならば、bhūtvā は「本有」と訳されよう。

(3) 同じく梵本異か、取意訳か。

(c) 四巻本について見るに

(1) abhūtvā は「欲令無種有種因果現」(大正第十六巻頁四八三中)のうちの「無種」であろうか。

(2) abhūtvā の個所は「或言生已滅」(右と同所)の「生已」であろうが、これは意を尽していない。というのは bhūtvā は生已のみを意味するのではないから。そしてここではその訳語としては「有已」が適當である。

(3) 同じく梵本異か、取意訳か。いずれとするともこの箇所の訳文は難読にして難解である。

かくて、これら三本の訳を参考として、訳語を工夫すれば、(a) abhūtvā は「本無」(十巻本)であり、あるいは「無有已」である。しかし後者は原梵語の意味を直訳によりて出しているが、訳文としては意味がとられ難い欠点をもつ

ている。(b) bhūtvā は「有已」(七卷本)であるが、あるいは「本有」でも良いであろう。このいずれの場合にも問題は後接字の “tvā” (Absolutivum I) の意味を、漢字を以て、どこに表はすかに、特に、かかっている。

右の三本についての考究の結果を用いて、南条本によりて訳すれば、次ぎの訳文を得ることとなる。「あるいは沙門、あるいは婆羅門のある者どもは主張する、本無にして、存在するものどもうち因と果との関係によりて顕現せしめられたものと、時に依存するものと、蘊と界と入(処)とが諸縁によりて生じ住することを。また彼らは存在するものどもが本有して(有り已りて)滅 vyaya する、と主張する」。

かくてこの経のこの箇所の意味するのは次ぎの二点に帰着する。(a) 一つには、それは相続と作用と生と滅 bhān. ga と涅槃と道と業と、その果と四諦とを滅亡せしめ、断滅せしむる者どもの邪見の排斥である。二つには、それは自心所現の妄分別ということに基づきて、無間生 nairantar. yapravṛtīh (七卷本では相続生) を正見として顕示することとである。それゆえに、この意図は中道たる縁起の顕示に帰着する。

以上のわれわれの解釈を支えるものとして想起せられるのは大般涅槃経の「本有今無」の偈である。それは左のもので

ある。

本有今無 本無今有
三世有法 無有是処⁽¹²⁾

この偈が縁起の偈であることは北本、卷二十八、獅子吼菩薩品第十一之二⁽¹³⁾において最も良く見られる。曰く

一切諸法本無有性。以是義故、我説是偈

本無今有 本有今無

三世有法 無有是処

善男子。一切諸法因縁故生、因縁故滅。

右の偈の注釈たる涅槃経本有今無偈論⁽¹⁴⁾が、天親菩薩造・真谛三蔵訳として漢訳で伝えられている。そのうちから、右のわれわれの入楞伽経の解釈を支持すると考えられるものが読取られうる。論は順次に本有今無と本と本無今有と三世と無有是処とを明らかにして、因中有果や無因などの外道の説を破するに努める、そして趣旨からすれば、前二行を断見となし、第三行を常見となして、「断と常とを離れたる、是れ中道なり」といい、「二辺を離れたる、是れ真の十二因縁なり」という。論末に無常偈の釈がある。これは附録でもあらうが、縁起の運動の二方向を意味するものであるから、これは単なる附録であるよりは、むしろ補説であらう。

かくして、若し右の間接的証明が成立するとすれば、南条

本のこの箇所は、顕正としては、縁起を暗示していることが明らかである。それは八不の縁起（中論）、十不の真実（大乘莊嚴經論）である。そしてこの縁は、それに至るまでの縁起についての深き諸考察を継承して、唯自心所見の見地から、その縁起を言うのであるから、その限りではこの縁起と言はるる生滅の法則は心 *cittam* について、その法則となされているのである。この心の法則たる縁起が三自性と云はれる。これは正に応知である。そして心はアーラヤ識であり、これは正に応知依止である。そしてこの縁起は何者の作りたるにもあらず、正に法性・法界・法住として無為なる、則ち作られたるには非ざる法則である。ここからして経意を究極すれば、それは唯心を超過し、⁽¹⁵⁾ 大乘をも見ざるところにある。⁽¹⁶⁾ しかし所取の唯心のゆえに能取も無き無心へ超入するとき、本来の真実なる唯心が現はれる。そしてこれこそが自覚聖智の活動領域である。ゆえに若しこの点に根拠して言うならば、経意は総べての正しく思惟する人々に通ずるところの、いわゆる経年哲学 *philosophia perennis* に存することとなる。そして仏教は最初からこの経年哲学として出発しているものであり、これを正法と名づけてきているのである。

この縁起については、なお、多くのことが言はれうる。しかしここで力説せらるべきはこの縁起が運動の二方向をもっていることである、一つには随於生死の、二つには随大涅槃

生滅の法則について（川田）

の。そして唯識とか唯自心所見とかは、一往は、随於生死の運動をする縁起についての理説である。これに対して八正道・三学・六度・四向四果・十地などは随大涅槃の運動の縁起に関するものである。賢首大師法蔵が十地を因果の縁起というのは良く言いあてた言葉である。

この随大涅槃の運動の縁起を瑜伽地論菩薩地は第十法雲地をもって止めて、仏地はこれとほぼ同じとするのは、なほ一段の思想的展開を待つものである。ゆえに菩薩地の上に仏地 (*buddhahūmi*) が清浄法界・四智・三身として展開せられて来るのは当然である。さらにこの清浄法界を法界体性智とするとき、五智五仏の説が立てられる。入楞伽縁は、もちろん、これを正面から説いてはいないが、⁽¹⁸⁾ しかしこれを準備している、⁽¹⁹⁾ 自覚聖智とか根本仏とか本住法とかによりて。

この一心の縁起即四聖諦の知見は、若しヨーロッパの学名をもってならば、*ethica* にして *metathica* たるものと名づけらるべきであろう。そしてこの場合には *metaphysica* の表現は努めて回避せられるのが良い、⁽²⁰⁾ というのは、仏教のうちには古代ギリシア以来の意味にての *physica* はあらぬから、従って *metaphysica* はあらぬから。また形而上とは道であり、一陰一陽を道と呼ぶのは古代シナ思想である。縁起と四聖諦とを根本真理とする仏教は知見又は如来知見なのである。相互理解のために然るべき表現が用いられるのは

良いが、それによりて思想が混同せられてしまつて、各々の又は他方の本来の姿が見失われてはならぬ。

三 比較的考察

以上により仏教における生滅の法則が縁起として取出され、その特質のいくつかが言はれた。しかし、これを比較考察することによりて、この仏教における生滅の法則の特質を明らかにし、以て如来知見の純化と維持と展開とに資することとしたい。経はインド哲学内での他の諸学派を批判している。しかしここでの比較の他の項はギリシア哲学における生成の法則と、キリスト教哲学におけるそれとである。

先ずギリシア哲学におけるものとの比較をしよう。この哲学の内では質料主義 *materialismus* と形相主義 *idealism-su* とが対立しているが、しかし両者共に「無からは無」 *ex nihilo nihil* という生成の原則を固く守っているのである。

(a) 質料主義者について見るにデモクリトスは「何物も有らぬものからは生ぜず、また滅して有らぬものとはならぬ⁽²¹⁾」ということが真であると考えていた。

このデモクリトスを復興したるエピクロスも正に同一の主張をしている。彼によれば

「何物も有らぬものからは生じない。(若し然らずとすれば) 総べての物が総べての物から、種子を全

く必要とすることなくして、生ずることともなるであらうから。また見えなくなる物が滅して有らぬものとなるのであるとすれば、総べての物は滅してしまふであらう、総べての物が分解せられて、それとなるところのものが有らぬこととなるから。」⁽²²⁾

これは原子論者デモクリトスの趣旨を良く發揮している。またこれは近代の物質不滅則あるいは勢力不滅則に通ずるものをもっている。

(b) 次ぎに形相主義者について見るに、プラトンはいう「総べての生成するものは必ず或原因から生成する、というのは、総べての物にとりて原因が無くして生成することは不可能であるから」⁽²³⁾

と。ここでは原因として實在(形相)と質料とが考えられているのであるが、後には更にコーラ (*khôra* 場所) が加えられる。また他処⁽²⁴⁾ではコーラを挙げないが、限と無限と能作者とが原因として考えられており、彼は

「総べての生成するものは必ず或原因によりて生成する」

というのである。その趣旨は「無からは無」に在るのであつて、他にではない。

またアリストテレスは次ぎの通りに言う。

総べての生成するものは、有るものからか又は有ら

ぬものから、生成するのであらねばならぬが、この二つのうち有らぬものからの生成はありえない。⁽²⁵⁾

この二人に通じて言はれうること、それは、有る所の原因から生成するものが生成するということである。これは質料因と形相因とが常に有るところのものであって、決してあらぬものではない、という主張となる。この主張は、ただ簡明にのみ言えば、彼らの神に並立する諸原因と宇宙の常恒性又は永遠性との意味を含んでいるのである。

次にキリスト教哲学は、その最高の原理たる聖書の神のゆえに、このギリシアの哲学者達の考え方を嫌悪する。その結果として、多くの辛酸を経たる後に、形相因を神の知性のうちえ押し入れ、第一質料は神によりて *nihilum* 虚無から創造せられたとした。これは聖書の唯一なる神に対立する諸原理を整理したことである。この創造因たる神は、真実在ではあるが、彼自身の実在の僅少なる一部分を用いることもなくして、彼以外の一切の存在するものどもを虚無から創造⁽²⁶⁾した、と主張せられるのである。この虚無からの創造の思想は旧約聖書から新約聖書が継承する。トーマス・アクィナスはこれを次ぎの如くに言表はしている。

この真理を普遍信仰は告白する、それにより普遍信仰は、神が彼の実体からではなくて、虚無から総べてのものを創造した、と断言するところの。⁽²⁷⁾

生滅の法則について(川田)

これによりて「虚無から総べてが」という生成の法則が言表はされている。そしてそれは聖書の、そして形相たる、神の全能性の信仰の真理なのである。そして、これによりて聖書の神が唯一にし最高なる原理となり、創造せられた宇宙は、永遠なるものではなくて、時間的なるものとなったのである。

以上の通りであるから

(a) ギリシア哲学における生成の法則は *physis* たる自然のそれである。そしてこれは質料主義と形相主義とに共通である、二者のはげしき対立にかかはらずして。そしてそれは、どこまでも、*ex nihilo nihil* である。

(b) キリスト教哲学における生成の法則は唯一の真実在たる、超自然なる、聖書の神の創造活動を意味する。そしてそれは *ex nihilo cuncta* (Thomas) とも *ex nihilo aliquid* (Bonaventura) とも言表はされている。

(c) 仏教における生成の法則は単に *ex nihilo nihil* という点では古代ギリシア哲学のと同様である。しかしそれゆえにとて、質料と形相との実体的原理を、仏教のうちへ持ち入れることは許されない。そしてその法則は *cittam* (心) のである。この心は *physis* たる自然とも、また創造する神とも異なるところの、世界哲学史のうちでの一つの独立なる思想の流れの根抵たるものである。

四 結 語

梵文入楞伽經の、この小論によりて問題とせられたる、箇所が、破邪によりて暗示するところのものが、断常の中、有無の中であるとすれば、それは深縁起である。それをこの経はアーラヤ識の縁起として把握し説示しているのである。所謂阿頼耶縁起は無明と渴愛とを動力とするところの染縁起である。一般には受取られているかと推定せられる。そしてこの経のアーラヤ識の深縁起はこの側面を、即ち随於生死の縁起を、もちろん、説いているが、しかし、それをのみではなくて、随大涅槃の縁起をも説いているのである。われわれは如来見がわれわれに開き示し、われわれをしてそれえ入らしめ、それを悟らしめる所の縁起が運動の二方向を持つてゐること、そしてそのいずれの方向をわれわれがとるかはこの今の中際における、縁起する五蘊たる、われわれ自身の決意にかかっているのであることを、冷と暖とを自知するが如くに、自知しなければならぬ。

経が批判して斥けているところの、無因論はもちろん、断見や常見や、サーンキヤやヴァイシェーシカや時論師や、シヴァあるいはアパラ・ブラフマンに相当するとも見られうる自在（イーシュバラ）を因とする説、などは、その批判によれば、因たりにぬものを因と主張するもの、そして人間の道

徳的知性的などの努力を怯弱ならしめて、無上覚えの正しき努力阻害をするものである。

それゆえに、われわれはこの古来の批判にもよく耳を傾けなければならぬ。しかしそれと同時に、あるいは他方において、われわれは明治以来の百年にわたりて、次第により良く知られてきたヨーロッパ哲学の、即ちギリシア哲学およびその系統の哲学とキリスト教哲学とにおける生成消滅の原理を知り、比較して、仏教における生滅の法則を確実に把握しなければならぬ。それぞれの独立なる哲学や宗教は、その根柢について見れば、転釈によりて他の者とは成らしめられえないものである。

しかし、他方において、それらの差異を超えて、それらの根柢を成しているところの諸問題を考究するもの、それが第十六世紀以来ヨーロッパでは *philosophia perennis*（経年哲学）と呼ばれている。このものへ仏教は、晩くとも、この経によりて第四世紀末には到達していると見られうる。いな、一心の縁起を説く如来知見は、これを、最初から持っていたと見られうる。その発達の各段階における人・時・処の衣を剥いで見よ。梵文入楞伽經南条本頁六十五、頌一三〇——一三三などがその証明となるであろう。

出典

- (1) Lanhāvātāra sūtra, ed. by B. Nanjio, p.37, l. 6.
- (2) Op. cit., p.37, ll.12—14.
- (3) Do., p.37, ll.14—16.
- (4) Do., p.37, ll.17—18.
- (5) Do., p.37, l.18.
- (6) Do., p.38, ll.3—5.
- (7) Do., p.38, ll.5—18.
- (8) Do., p.38, l.18.
- (9) Do., p.38, l.18——p.39, l. 2.
- (10) Do., p.39, ll.2—4.
- (11) Do., p.39, ll.5—8.
- (12) 大正第十二卷頁五二四中（北本）。大正第十二卷頁七六九上（南本）。
- (13) 大正第十二卷、頁五三一上。同卷頁七七六上。
- (14) 大正第二十六卷、No.1528.
- (15) 梵文入楞伽經（南条本）、頁二九八—二九九（偈二五六、二五七）、大乘入楞伽經（大正第十六卷、頁六二九中。）
- (16) 梵文入楞伽經（南条本）、頁六五、偈一三〇—一三三、大乘入楞伽經（大正第十六卷、頁六二九中）。
- (17) 大般涅槃經（大正第十二卷、頁五一六下、七六〇下）

- Yogācārabhūmi, Part I, ed. by V. Bhattacharya, p.203, ll. 4—5; p.198, ll.18—19. University of Calcutta 1957.
- (18) 梵文入楞伽經（南条本）、頁二四二。
 - (19) 同本、頁一四三。
 - (20) 周易、繫辭上（漢文大系、周易卷十七、頁八、二八。）
 - (21) Diels-Kranz: *Fragg. d. Vorsok.* Bd. II, *Démokritos*, B, 156.
 - (22) Epicurus: *The Exstant Remains*, p.20. Ed. by Cyril Bailey. Oxford 1926.
 - (23) Plato: *Timaios*, 27 d 5——28 a 6. Cf. op. cit., 48 e.
 - (24) Plato: *Philebus*, 26 e——27 c
 - (25) Aristoteles: *Physica*, I, 4. 187 a 32.
 - (26) *Vetus Testamentum, Liber II Machabaeorum*, cap. VII, 28.
 - (27) Thomas Aquinas: *Summa Contra Gentiles*, I, c. 17. Cf. *Thomae ST. I. Q. 45, a 1. Bonaventura: Opera Theologica Selecta*, Tomus II, p.12 a; *Breviloquium, Pars Secunda*, c.1. §§ 1—2. Augustin: *De Vera Religione*, VII 13.